講演

（令和元〔二〇一九〕年十月二十六日）

令和の元号と万葉集

浅野則子

（本学文学部国際言語・文化学科／本学大学院文学研究科日本語・日本文学専攻教授）

○万葉集とその時代

万葉集

二十巻　大伴家持の手が加わったとされる。　約四千五百首

歌体　短歌・長歌・旋頭歌

部立　相聞・挽歌・雑歌

表記

余能奈可波　牟奈之伎母乃等　志流等伎子　伊与余麻須万須　加奈之可利家理　大伴旅人　五―七九三

春楊　葛山　発雲　立座　妹念　十一―二四五三

第一期　壬申の乱（六七二）まで

舒明、斉明につながる人物が多い。儀礼的・集団的発想。公的な歌が多い。

額田王

熟田津（にきたつ）に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな　額田王　一―八

第二期　平城京遷都（七一〇）まで

律令国家の確立。天皇の地位の高まり。
表現技巧の発達。公的・私的な歌。　宮廷歌人の活躍。
柿本人麻呂・持統天皇・高市黒人

第三期　　天平九年（七三七）まで
天平文化・和歌の個性化。表現・内容に深みを増す。
山部赤人・大伴旅人・山上憶良・高橋虫麻呂

第四期　　天平宝字三年（七五九）まで
天平文化の成熟・不安定な政情。
個性的・繊細な表現。中古の和歌へと続くもの
大伴坂上郎女・大伴家持・笠女郎

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ　十九―四一三九
うらうらに照れる春日に雲雀（ひばり）あがり情（こころ）悲しも独りしおもへば　十九―四二九二
大伴家持

大伴旅人　大納言大伴安麻呂の長男。従二位・大納言。天平二年（七三〇）まで大宰帥。
着任は神亀四年（七二七）もしくは神亀五年（七二八）。
長男は家持。異母妹は大伴坂上郎女。『懐風藻』（万葉集同時代の漢詩集）に漢詩も残している。

○旅人の時代と大宰府

大宰府

大宰少弐石川朝臣足人の歌一首

さすたけの大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君

帥大伴卿の和ふる歌一首

やすみししわご大君の食国は倭もここも同じとそ思ふ

六ー九五五～六

大宰少弐、小野老朝臣が歌一首

あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今さかりなり

防人司佑大伴四綱が歌二首

やすみしし我が大君が敷きませる国の中には都し思ほゆ

藤波の花は盛りになりにけり奈良の都を思ほすや君

帥大伴卿の歌五首（そのうちの一首）

わが盛りまた変若（おち）めやもほとほとに寧楽の京（みやこ）を見ずかなりなむ

三ー三二八～三三一

敢へて私懐を布ぶる歌三首

天離る鄙に五年住むまひつつ都のてぶり忘らえにけり

五ー八八〇

我が主の御霊賜ひて春さらば奈良の都に召上げたまはね　　五一八八二

天平二年十二月六日に筑前守山上憶良謹上す。

○大宰府の宴

天平二年正月の十三日、帥老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。時に初春の令月、気淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。しかのみにあらず。曙は嶺に雲を移し、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕岫に霧を結び、鳥はうすものに移りて林に迷ふ。庭には舞ふ新蝶あり、空には帰る故雁あり。是に天を蓋にし地を坐にして、膝を促け觴を飛ばし、言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開き、淡然として自ら放にし、快然として自ら足れり。若し翰苑にあらずは、何を以てか情をのべむ。詩に落梅の篇を紀す。古今それ何ぞ異ならむ。園梅を賦し、聊か短詠を成すべし。

正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ　　大貳紀卿

梅の花今咲けるごと散り過ぎず我が家の園にありこせぬかも　　少貳小野大夫

梅の花咲きたる園の青柳は蘰にすべくなりにけらずや　　少貳粟田大夫

春さればまづ咲くやどの梅の花独り見つつや春日暮らさむ　　筑前守山上大夫

世の中は恋繁しゑやかくしあらば梅の花にもならましものを　　豊後守大伴大夫

梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ

梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林にうぐひす鳴くも

梅の花咲きたる園の青柳を縵にしつつ遊び暮らさな

うちなびく春の柳と我がやどの梅の花とをいかにか別かむ

春されば木末隠りてうぐひすそ鳴きて去ぬなる梅が下枝に

人ごとに折りかざしつつ遊べどもいやめづらしき梅の花かも

梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや

万代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし

春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜眠も寝なくに

筑後守葛井大夫

笠沙弥

主人

大監伴氏百代

少監阿氏奥島

少監土氏百村

大典史氏大原

少典山氏若麻呂

大判事丹氏麻呂

薬師張氏福子

筑前介左氏子首

壱岐守板氏安麻呂

梅の花折りてかざせる諸人は今日の間は楽しくあるべし

年のはに春の来らばかくしこそ梅をかざして楽しく飲まめ

梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来たるらし

春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びに相見つるかも

梅の花手折りかざして遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり

春の野に鳴くやうぐひすなづけむと我が家の園に梅が花咲く

梅の花散り紛ひたる岡辺にはうぐひす鳴くも春かたまけて

春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る

春柳縵に折りし梅の花誰れか浮かべし酒坏の上に

うぐひすの音聞くなへに梅の花我家の園に咲きて散る見ゆ

我がやどの梅の下枝に遊びつつ鶯鳴くも散らまく惜しみ

梅の花折りかざしつつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ

妹が家に雪かも降ると見るまでにここだもまがふ梅の花かも

神司荒氏稲布

大令史野氏宿奈麻呂

少令史田氏肥人

薬師高氏義通

陰陽師礒氏法麻呂

算師志氏大道

大隅目榎氏鉢麻呂

筑前目田氏真上

壹岐目村氏彼方

対馬目高氏老

薩摩目高氏海人

土師氏御道

小野氏國堅

うぐひすの待ちかてにせし梅が花散らずありこそ思ふ児(こ)がため

霞立つ長き春日を挿頭せれどいや懐かしき梅の花かも

後に追ひて梅の歌に和へた歌

残りたる雪にまじれる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも

雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがも

わが宿に盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも

梅の花夢に語らく風流(みやび)たる花と我思ふ酒に浮かべこそ

筑前掾門氏石足(いそたり)

小野氏淡理

八一五～八四六

五一八四九～五二一